

『マハーバーラタ』モークシャダルマ部における dharmalakṣaṇa ——第 4 の dharmalakṣaṇa 「利益」とは——

藤 誓 子

dharmā はインド思想において重要な概念であり、非常に多義的な語であるため、dharmā の概念を簡潔に言い表すことは困難である。しかし、dharmā の概念を理解する上でのキーワードとして、dharmalakṣaṇa (ダルマの指標) という言葉を『マヌ法典』(Mn) において確認することができる。そこには、4 種類の dharmalakṣaṇa、即ち①ヴェーダ (veda)、②伝承 (smṛti)、③善人の習慣 (śadācāra)、④心の満足 (ātmanas tuṣṭiḥ) が示されている。dharmalakṣaṇa に関する記述は Mn だけでなく、『マハーバーラタ』(MBh)、特にモークシャダルマ部 (Mdh) にも見られる。Bhīṣma が Yudhiṣṭhira に 4 種類の dharmalakṣaṇa を示すのだが、Yudhiṣṭhira はそれらの dharmalakṣaṇa の矛盾点をそれぞれ指摘する。その批判を受けて、Bhīṣma は「Jāṇali と Tulādhāra の対話」という、商人がバラモンに教えを説く古譚を取り上げ、Tulādhāra の説示を話し始める。

本稿では、Mdh の dharmalakṣaṇa (MBh12. 251) と Yudhiṣṭhira が指摘する dharmalakṣaṇa の矛盾点 (MBh12. 252) を確認した上で、Tulādhāra が何を dharmā として重視していたのか (MBh12. 253–256) を考察し、MBh12. 251–256 が説かれる意義を明らかにする。

1. Mdh に説かれる dharmalakṣaṇa

Mdh に説かれる dharmalakṣaṇa は①善人の習慣 (śadācāra)、②伝承 (smṛti)、③ヴェーダ (veda)、④利益 (artha) である¹⁾。「ヴェーダ」、「伝承」、「善人の習慣」は MBh の他の箇所にも言及されており²⁾、Mn とも共通しているため、それらの dharmalakṣaṇa は一般的に受け入れられていたものだと理解できる。一方、Mdh の dharmalakṣaṇa の特徴は第 4 の「利益」であると言える。なぜなら、これらの章を読み進めていくと、dharmalakṣaṇa としての「利益」は論理性と永遠性を有しており、またあらゆる人に当てはまるものだと解釈できるため、他の 3 つと異なるからである³⁾。

2. Yudhiṣṭhira が指摘する dharmalakṣaṇa の矛盾点

1) 「善人の習慣」の矛盾点

「善人は善い習慣によって特徴づけられる人であり、善い習慣は善人による行いである」という見解は堂々巡りである。「善人の習慣」が定義づけられないのだから、そもそも「善人の習慣が dharma と考えられている」という見解自体成り立たない⁴⁾。

2) 「伝承」の矛盾点

聖仙たちの役割の1つは dharma を考察し、後世にそれを伝えていくことである。しかし、「蜃気楼の形」をして現れる dharma は、彼らの分析的な追究により再び見えなくなってしまう。このように、分析的な追究によって dharma が姿を消してしまうのであれば、「伝承」は dharma の顕現を妨げることになる⁵⁾。

3) 「ヴェーダ」の矛盾点

「ヴェーダ」は1つではなく、複数存在する。ある「ヴェーダ」に認められていることも、異なる「ヴェーダ」では認められていない場合、どの「ヴェーダ」を判断基準とすればよいのかという問題が生じる。また、全ての「ヴェーダ」を判断基準とするならば、判断基準自体がなくなってしまう⁶⁾。

4) 「利益」の矛盾点

ある ācāra を実践することで利益を得る人もいれば、同じ ācāra を実践することによって損をする人もいる。或いは、両者共に利益を得たり、損をしたりする⁷⁾。ācāra は誰にとっても優れているわけではないので、「あらゆる人々にとって利益となる」という論理は成立しにくい。

3. 「Jājali と Tulādhāra の対話」— Tulādhāra の説示—

dharmalakṣaṇa の矛盾点を指摘した Yudhiṣṭhira に対して、Bhīṣma は「Jājali と Tulādhāra の対話」を取り上げる。

3.1. 「Jājali と Tulādhāra の対話」の要約

森の中で苦行を行う Jājali の頭に2羽のスズメがやって来て、そこに巣を作ったが、Jājali は微動だにせず立ち続け、そのまま苦行を続けた。しばらくして、スズメの雛たちが生まれ、彼らの巣立ちが終わると、Jājali の中に「私は完成した」という自尊心が生じた。すると、彼は「dharma に関してお前はベナレスに住む Tulādhāra には匹敵しない」という声を空中に聞く。そして、その声に腹を立て

(264) 『マハーバーラタ』 モークシャダルマ部における dharmalakṣaṇa (藤)

た Jājali は Tulādhāra に会うために、ベナレスへ向かう。

Jājali がベナレスに到着すると、Tulādhāra は彼を歓待し、dharma の微妙な点について語り始める。Tulādhāra の説示が終わる頃、Jājali は彼の勧めにより自分が育てた鳥たちを呼び戻すのだが、すると今度は呼び戻された鳥たちが Jājali に対して説示を始める。これらの話を聞いた Jājali は間もなくして寂靜に入り、Tulādhāra と共に天界に行き、思いのままに時を過ごした。

3. 2. 「不殺生 (ahimsā)」・「無畏 (abhaya)」の実践

Tulādhāra は日常生活におけるどのような行為が dharma に当てはまるのかということについて述べる⁸⁾。彼はそれに関して「生き物にとって危害のない、或いは危害の少ない振る舞い」こそが最高の dharma であると説いている⁹⁾。また、「無畏」を実践する者は、苦行、祭式、布施、英知に基づいた言葉によって得る果報を全て獲得することができ、祭式執行者として「無畏」という贈物、つまり「無畏」の境地を獲得することについて論じている¹⁰⁾。さらに、彼は「不殺生」よりも優れた dharma は存在しないと述べ、「生き物に対して危害や恐れを与えないこと」を重視している。

しかし、生きていくために必要不可欠な食糧は農耕によって生み出され、豊穡を願う祭式も行われているが、「不殺生」の実践を徹底するならば、犠牲獣を供物として用いることができないため、祭式を行うことが不可能となる。それゆえ、Tulādhāra は祭式を否定しているのではないかと Jājali が疑問を呈する¹¹⁾。

3. 3. 祭式の供物として用いるべきものは何か

Jājali から祭式に関する疑問を聞いた Tulādhāra は、自分がヴェーダの権威や祭式を否定しているわけではないことを述べる¹²⁾。ここで Tulādhāra が問題とするのは、何を祭式の供物として用いるかである。彼は「人々はあれもこれもと限りなく布施を行おうとするが、神々を満足させるものこそが善い供物である¹³⁾」と説く。では、「善い供物」とは何か。善良な者たちは供物として、森林樹、薬草、果実、根を用いており¹⁴⁾、これらの供物は生き物を殺すことなく獲得することができるものである。つまり、「善い供物」とは穀物や薬草といった「不殺生」によって得られるものであり、Tulādhāra は祭式においても「不殺生」の徹底を主張する。

4. MBh12. 251-256 が説かれる意義

Tulādhāra は「危害のない、或いは危害の少ない振る舞い」こそが最高の

『マハーバーラタ』モークシャダルマ部における dharmalakṣaṇa (藤) (265)

dharmā であると説き、祭式に用いる供物に関しても、「不殺生」によって得られる「善い供物」を用いるべきであると主張している。「善い供物」を用いる祭式の場合、祭式を行う者も殺生を行わずに済み、生き物も殺されずに済むので、両者にとって有益である。まさに、第4の dharmalakṣaṇa である「利益」の具体例を提示するために、Bhīṣma は「Jājali と Tulādhāra の対話」を取り上げたと考えられる。

Mdh と Mn に説かれる dharmalakṣaṇa は類似しているが、第4の dharmalakṣaṇa に明らかな相違がある。Mn の「心の満足」は「識者たちの心の満足」であり、この dharmalakṣaṇa はバラモンにとって好ましいものである。一方、Mdh の「利益」は「あらゆる人にとっての利益」であり、社会階級における普遍性を伴っている。MBh12. 251-256 に登場する人物から考えると、Mdh の dharmalakṣaṇa は上位3階級のヴァルナに通じるものであり、バラモン優位な立場から書かれている Mn の dharmalakṣaṇa とは大きく異なる。一見同じように見える Mdh と Mn の dharmalakṣaṇa であるが、その相違を明確にするために MBh12. 251-256 が説かれたのではないかと考えられる。

-
- 1) MBh12. 251. 3. (テキストはプーナ批判校訂本を使用する.) 2) MBh3. 198. 78, MBh13. 129. 5. 3) Bhīṣma は譬えを用いながら「強者は、『他人の財産を奪うべきでない』や『与えるべきである』という dharma は弱者によって始められたものであり、弱者にとってのみ好ましい dharma である」と考える。強者と弱者の間に不平等さが生じているように見えるが、何かしらの要因によって強者が弱者の立場にたった時、その dharma は今まで強者だった者にとって好ましいものになる。なぜなら、人は永遠に強者であり続けることはないのだから」と説明する (MBh12. 251. 12-13ab, 17-18).
- 4) MBh12. 252. 5. 5) MBh12. 252. 13-14. 6) MBh12. 252. 10. 7) MBh12. 252. 18. 8) Tulādhāra は複数の dharma について言及しているが、ここでは「不殺生」と「無畏」という言葉に注目して考える. 9) MBh12. 254. 6.
- 10) MBh12. 254. 28-29. 11) MBh12. 255. 2-3. 12) MBh12. 255. 4. 13) MBh12. 255. 7. 14) MBh12. 255. 25.

〈キーワード〉『マハーバーラタ』, モークシャダルマ, dharma, dharmalakṣaṇa, Tulādhāra
(京都大学大学院)